

第5学年3組 外国語活動指導案

指導者 岡本真砂夫 (T1)

〇〇 〇〇 (T2)

1 単元 “How many?” (“Hi, friends! 1” Lesson 3)

2 趣旨

- 本単元では、可算名詞の数量を尋ねる表現(How many)を扱う。“How many apples?”の表現は、元々は以下のような文章であると考えられる。

- ・ “How many apples are there?” (存在構文：第1文型の派生形、“How many apples”は文の主語)
- ・ “How many apples do you have (want)?” (第3文型、“How many apples”は文の目的語)

児童の発達段階から “How many *N*?” 以外の *be* 動詞や、主語と一般動詞が簡略化され、発話しやすい形になっている (*N*は名詞を表す)。*N*は、複数形で尋ねることになっている。これは、単数・複数両形の返答が期待される場合、複数形で尋ねる表現が無標(unmarked)であるためである。返答は、複数形なら “Two apples.” と可算名詞に複数を示す “s” をつける必要がある。一方、普通名詞の単数形なら不定冠詞が必要となり、“One (an) apple.” と発話する必要がある。このため、“Hi, friends!” デジタルコンテンツでは、児童の混乱を防ぐため、ほぼ全て複数形にて児童に提示し、単数形に関しては不定冠詞の “an” を用いず、“One apple” と数詞にて提示している。疑問副詞 “How” は、“Hi, friends! 1” Lesson 2 の “How are you?” と本時で扱われている。しかし、不可算名詞の量について尋ねる “How much?” は “Hi, friends! 2” の中にも設定されていない。児童の発達段階からは、本来「数」より「量」を先に扱う方が自然と考えられるため(今井, 2016)、可算・不可算の扱いは小学校外国語活動における課題の一つと考えられる。なお、Lesson 2 で扱われている “How are you?” は第2文型のコンピュータ文であり、本単元とは基底構造が異なる。次単元では、“Do you like apples?” と、好きか嫌いかを閉質問(Closed question)で尋ねる表現が扱われている。「好み」(like)を扱う文章の場合、複数形が無標であるためだ。本単元で複数形を扱うことは、文法項目的に次単元に繋がっているといえる。

- 本学級の児童は、外国語活動の授業を楽しみにしている児童が多く、対話活動では習った英文をなるべくたくさん使うように活動するなど、意欲を持って取り組んでいる児童が多い。これまでの外国語活動の授業では電子黒板(IWB)等のICT機器を活用し、児童の理解を促せるよう、教材の焦点化を行ってきた(清水 2006)。また、“Hi, friends!” の教材だけでなく、児童に身近な題材を取り上げてきた。例えば、選択肢の中から好きなものを答えさせる “Which do you like?”、言い淀んだときに繋げる言葉(Filler)としての “Let me see.” 等である。また、音声上の特徴としてピッチに焦点を当て、“How are you?” の問いかけと返答における違いに気づかせる活動にも取り組んできた。
- 中心活動の対話では、屋台で店主が「いくつ欲しいか」尋ねる状況を設定した。商品は「たこ焼き」や「ラムネ」等、日本のものとした。たこ焼きは、“Octopus dumplings” と訳することもできるが、本時ではそのまま「たこ焼き」(Takoyaki)とする。日本の品物を扱う利点は、2つ挙げられる。
 - ・ 児童に親しみがあり、発話しやすいこと。
 - ・ 外来語扱いとなるため、不可算名詞(uncountable noun)として扱えること。

不可算名詞扱いなので、児童が答える際、“One Takoyaki please.” “Two Takoyaki please.” 等となり、不定冠詞の “a” や、複数形の “s” を発話する必要がなくなる。そのため、児童の文法上の負担が軽くなると考えた。小学校外国語活動において文法上の正確さにこだわる必要はない(MEXT, 2008)が、中学校・高等学校での学習を踏まえ、文法項目には合理的に説明ができるよう、配慮することとした。また、児童はお金のやりとりについての発話を経験していない。そこで、“Special day” という状況を設定し、さいころの数字を当てたら商品をもたらえるという状況を設定することにした。中心活動では「お店屋さん(shop keeper)」と「お客さん(customer)」に分かれ、「屋台で買い物を楽しむ」状況で英語に親しませる。その際、“How many Takoyaki?” “Two please.” といった対話だけでなく、“Here you are.” “Thank you.” 等、なるべく多くの英語を使わせたい。英語を単なる「記憶」ではなく、生きた「知識」として児童が使えるよう、中心活動では児童が教室の中を自由に歩き回れる活動を設定した。これは、言語は自然な身体活動

を伴う中で習得されると考えているからである(Okamoto, 2014)。児童に自然な状況の中で英語に親しませ、会話を通じた他者との対話の楽しさを味わわせたい。なお、お金のやりとりは不可算名詞の「量」について尋ねる “How much?” を学習しなければならないが、先述したとおり、“Hi, friends!”には不可算名詞を尋ねる対話文が設定されていない。そこで、本時の後、“How much N?”の対話文を別途授業の中に取り入れていきたい。

3 小中一貫教育の視点

小学校段階では、“How many apples?” “Two apples.”の表現に音から慣れさせ、友達との対話を楽しむことをねらいとする。中学校では文字を使って、この表現を書いたり読んだりできるようになると共に、単数、複数形における統語上の処理を正しく行えるようになる。具体的には、返答する際、可算名詞においては、普通名詞単数形では不定冠詞 “a” を、複数形では語尾に “s” をつけられるようになる。さらに、可算名詞に対して形容詞 “many” “few” 等を用いた修飾ができるようになる。また、不可算名詞に対しては “How much N?” と尋ね、返答に “much” “little” 等の形容詞を用いた修飾ができるようになる。疑問副詞 “How” に関しては、第2文型の “How is the weather?” 等、コピュラ文として用いることができるようになる。

4 単元の目標

- ・ 積極的に数を数えたり、尋ねたりしようとする。【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】
- ・ 1～20の数の言い方や数の尋ね方に慣れ親しむ。【外国語への慣れ親しみ】
- ・ 言語には、それぞれの特色があることを知る。【言語や文化に関する気づき】

5 主な言語材料

Hello. / Welcome. / Come here. / Good luck. / How many N? / One, two, three, four, five, six please.

Takoyaki (たこ焼き), Ramune (ラムネ), Ringo ame (リンゴ飴), Karaage (からあげ), Dorayaki (どら焼き), Taiyaki (たい焼き), Ikeyaki (いか焼き), Watagashi (わたがし), please.

Here you are. / Thank you. / Let me see. / One ~ twenty.

6 学習計画 (全3時間)

第1時	存在構文の “How many?” に慣れる。……………	1時間
第2時	夜店の状況で “How many N?”の活動を楽しむ【本時】。……………	1時間
第3時	所有の “How many?” を尋ねる活動を楽しむ。……………	1時間
第4時	量を尋ねる状況で “How much N?” に親しむ……………	1時間
第5時	夜店の状況で “How much N?” の活動を楽しむ……………	1時間

7 本時の学習 (第2時)

(1) 目標

- ・ 対話を通して “How many N?” の表現に慣れ、習得する。
- ・ ジェスチャーや既習対話文も使いながら、友達との対話を楽しむ。
- ・ シラブル言語としてのリズム、強弱等、英語の音声的特徴に親しむ。

(2) 展開

学習活動	○教師の支援と指導上の留意点 ●評価		備考
	T1	T2	
(1) あいさつをする。 ・ “How are you?” と、互いにあいさつをする。 (2) 数字の数え方に親しむ。 ・ 英語での数え方を確認する。 ・ Number touch game に取り組む。 ・ “Number rock” を歌う。	○ 話しかける、話しかけられる立場におけるピッチの違いを意識させる。 ○ 百玉そろばんを用いて数を数えさせる。 ○ マペットを使って対話の様子を紹介する。 ○ 音楽を通して、数詞の音韻的特徴を楽しませる。	○ 発話の難しい児童に対し、個別に支援する。 ○ より多くの児童が取り組めるよう、名簿順に指名する。	パソコン、電子黒板、フラッシュカード コンテンツ 百玉そろばん マペット
(3) 主活動の表現に親しむ。 ・ 英語カルタを楽しみながら、対話文を練習する。 ・ ジェスチャーの練習をする。	○ T1 と T2 で対話してみせ、所有の “How many?” の意味を確認させる。 ○ 活動のフィラーとしての、ジェスチャーを練習させる。	○ 対話文が発話できているか、確認し、分かりにくい児童と一緒に練習をする。	カゴ、バナナカルタ
(4) 「夜店で買い物を楽しむ」活動に取り組む。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> “Let’s enjoy shopping at the stalls at the festival.” </div>		
・ お客さん、お店屋さんに分かれ、屋台で買い物をする状況で “How many N?” の対話を行う。	○ T1 と T2 で対話してみせ、対話文の意味を推察させる。 ○ “Here you are.” “Thank you.” のやりとり、“Let me see,” “Good luck.” の等のジェスチャーを意識させる。 ○ 対話文を示す教材を再度提示する。	● 英語を用いて友達と対話しようとしているか。 ○ “How many N?” の表現を使いながら取り組むようにさせる。 ○ 代表の児童に全員の前で手本を示させる。	サイコロ、短冊、カード、紙皿
(5) 本日の既習事項の確認とあいさつ			

参考文献

今井むつみ. (2016). 『学びとは何か：「探究人」になるために』. 岩波書店.

MEXT (2008). 学習指導要領. Retrieved January 8, 2014, from Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology Web site: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm

Okamoto Masao. (2014). Analysis of Multi-Party Conversation in Foreign Language Activity. Retrieved from <http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/handle/10132/15032>

清水康敬 (2006). 『電子黒板で授業が変わる：電子黒板の活用による授業改善と学力向上』. 高陵社書店.

